

大学生における学業成績や課外活動を背景要因として、ソーシャルスキルが自己効力感に与える影響について

○野崎桜文・沖林洋平
(山口大学人文学部・山口大学教育学部)

目的

孤独・孤立を感じている人々はどの年代でも4割程度感じている(内閣府孤独・孤立対策推進室, 2024)。孤独感・孤立感は、社会的スキルの原因でもあり、結果でもあるとされている。(相川, 2007)つまり、社会的スキルを向上させることができれば、この課題にアプローチすることができると思われる。社会的スキルを向上させる方法の1つとして、ソーシャルスキルトレーニング(以下「SST」)があげられる。しかし、SSTには実施後長期間空くと、効果が半減するという課題がある。(相川, 1999)。前田ら(1998)ら、自己効力感が低いために、日常生活で社会的スキルが遂行されていないためであると考えられた。本研究では、SSTに自己効力感を高める要素を組みこめば、効果的なSSTを実施できると考えた。本研究は、社会的スキルと自己効力感の関係を検証し、SSTプログラム作成の基礎資料とすることを企図する。

本研究では、大学生を対象に学業成績や課外活動を背景要因としたソーシャルスキルが、自己効力感に与える影響について調査を行なった。本研究では、大学生と大学院生という学校種として取り上げた。

方法

調査時期 本研究の調査は、2025年7月から8月にかけて実施された。

調査参加者 本研究の調査参加者は、大学生と大学院生あわせて66名であった。(女性40名, 男性26名)

調査項目 1. 短縮版成人用ソーシャルスキル自己評価尺度(吉良ら, 2020)。「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」が青年にも適用可能であることを、示しつつ項目反応理論を使用し短縮された尺度。2. 特性的自己効力感尺度(成田ら, 1995)日本人に対しても、特性的自己効力感を測定する事ができる尺度。回答者の属性を尋ねる項目として、3. 大学にて所

属している部活動・サークル名, 4. 所属している部活動・サークルの活動頻度(活動なし、月2回程度、週1回程度、週2-3回程度、週4-5回程度), 5. 所属している部活動・サークルがどの程度好きか(5=とても好きである, 4=やや好きである, 3=どちらともいえない, 2=やや嫌いである, 1=とても嫌いである)。

手続き Google formsに調査用サイトを作成し、各自のペースで回答を求めた。

結果

短縮版成人用ソーシャルスキル自己評価尺度の各因子の平均点以上を高群, 平均以下を低群に分け、因子ごとに自己効力感の群間の得点比較するため、群(2)を参加者間要因, 因子(3)を参加者内要因とする2要因分散分析を行った。その結果、関係開始スキルの高低群×対人効力感($F(1,64) = 12.63, p < .01$)、関係維持スキルの高群×負荷耐性($F(2,128) = 19.30, p < .01$)において、交互作用が見られた。また、群×自己効力感の分散分析の結果、自己効力感の主効果($F(2,128) = 23.96, p < .01$)が見られた。

考察

本研究より、ソーシャルスキルの関係開始スキルが得点の高群, 低群にかかわらず自己効力感の対人効力感と有意差が見られた。つまり、従来のSSTに関係開始スキルを向上させる内容を加えることができれば、より自己効力感に変化を与えることができるのではないかと考えられる。

Table 1

ソーシャルスキルと自己効力感の記述統計量

因子名	平均値	標準偏差	因子名	平均値	標準偏差
ss_解読	3.76	0.84	se_回避傾向	3.06	0.58
ss_関係維持	3.97	0.69	se_対人効力感	3.00	0.60
ss_関係開始	3.15	1.25	se_負荷耐性	3.76	0.83
ss_主張性	2.41	0.98			
ss_記号化	4.02	0.68			
ss_感情統制	3.29	0.53			